

〈書 評〉

水俣が映す世界

原田 正純著

22cm 322頁 日本評論社 1991年

この本を読んでいるとなぜか大学時代に聞いていた浜田省吾の「僕と彼女と週末に」という歌を思い出した。歌の中の語りの部分で彼女と環境汚染事件らしきものに遭遇するところがあるからだ。もうひとつ水俣病の本を読むたびに必ず思い出されるのが大学生のとき何度か見た「水俣病の20年」という記録映画である。典型的重症例の水俣病の激しい症状に目を奪われたこと、この病気を引き起こした者達への怒りとチッソ水俣工場の労働者と漁民との連帯が実現したことへの感動そして患者の側に立って研究・診療をする医療従事者への共鳴を今でもはっきりと覚えている。

学生時代に「安全性の考え方」(岩波新書)、「水俣病」(岩波新書)、「苦海浄土」(講談社文庫)を読み、卒業してからも「水俣病は終わっていない」(岩波新書)、「水俣病にまなぶ旅」(日本評論社)等を読んだ。私自身が水俣病で多くのことを学んだ。社会を見る目、医者として科学者として必要なこと、科学者の立場性など多くのことを学び、そのことが進路を決める1つの要因になったといえる。

この本の著者は胎児性水俣病の存在を明らかにしたことを契機に水俣病研究を一生続けることになった精神科の医師である。著者の出発点は患者の家をたずね水俣病の実態のみならず漁民の生活や社会的弱者に対する差別の実態を肌で感じることであった。きっと実際に虐げられている人々に直接接することが水俣病を追いつづける原動力になっているのだろう。そして水俣病を追求し続け、そのかたわら日本のみならず世界の環境汚染や公害の健康影響を解明するための旅をするなかで水俣病の差別の構造すなわち「人を人と扱わない社会の仕組み」を知りそれが他の事件でも同様に存在することを見抜いた。それは企業の中で働く労働者に対する差別にも当てはまるし、先進工業諸国と発展途上国との関係でもいえることを本書は示している。

この本は水俣を出発点に世界の環境汚染とその健康



への影響を自分の足と医者としての専門性で確かめ、それを発生させた社会の仕組みを考えるなかで水俣を見つめかえす過程を書き綴ったものである。水俣病における差別の構造、水俣病の病像、水俣病の裁判、わが国の労災・公害・食中毒事件・環境破壊の多くはいずれも水俣病と共通の背景を持つこと、世界各国における水俣病を中心とした環境汚染と健康障害等を豊富な実例で示している。著者は人間疎外と呼んでいるが、この本を読めば社会的弱者や発展途上国の人々を差別することで私達の暮らしは成り立っているのではないかと考えさせられる。

チッソと行政は水俣病の発生を予防できなかった点、被害を最小限に食い止められなかった点、被害者の救済を迅速かつ適切にできなかった点のいずれにも過失があった。百歩譲って予見可能性がなかったとしても後者2つの責任は企業と行政にあったと言わざるをえない。待たせ賃訴訟(救済の遅れは行政の怠慢とするもの)がおこったこと自体、世界に恥ずべきことだと思う。さらにこの教訓をいかせず第2水俣病を発生させた責任は重大である。残念ながらこの体質はいまだに続いており、むしろさらに巧妙になって社会問題化させなくなっているとも言える。さらに残念なことに多くの医療従事者がこれらの過失に協力してきた実態が示されている。これが認定基準と水俣病の病像の科学的な捉え方を紹介した章で述べられている。誰の立場に立った仕事をするのかという問題意識をもつことも重要だということだ。このように今だに私達は水俣病からまなび続けなければならぬし水俣病を忘れてはならないと思う。

この本は厚く読みごたえがあるが医療従事者が必ず読まなくてはならない本である。まず「水俣病にまなぶ旅」をよんだ後にこの本を読むことを勧めたい。

尾崎米厚 (疫学部)